

義ののち、大分県安国寺集落遺跡、福岡県平塚川添遺跡、群馬県保渡田古墳群、大阪府新池埴輪窯跡、千葉県上総国分尼寺跡、岩手県志波城跡、福井県一乗谷朝倉氏遺跡、沖縄県首里城、の6つの遺跡についてそれぞれの復元整備例や活用の現状と問題点などが報告されました。

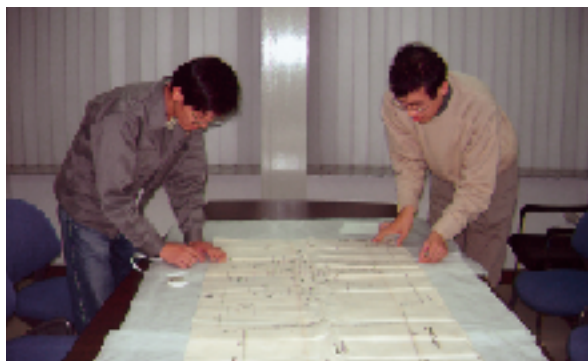
その後、全国各地方ごとの遺跡整備の現状をコメントしたパネリストも加えて、遺跡整備の理念、遺跡復元の技術・手法、整備した遺跡の維持管理の方法、遺跡の活用などを主なテーマに討議をおこないました。参加者約100名で、遺構復元と遺構保存とをどう調整するか、遺跡保存とバッファゾーン確保の問題、史跡公園とテーマパークとはどちらがうのか、などが議論されました。この研修で一定の結論が得られたわけではありませんが、遺跡の整備活用をどうすべきか、という問題は各地で直面している悩みであるだけに、時宜を得た企画として有意義であったとの感想が多くありました。ただし、日程の制約で討議が必ずしも十分深められなかったという指摘もあり、今後改善すべき点であります。

この研修は、研究集会方式という新企画のものでありましたが、こうした研修を今後積極的に進めてもらいたいとの声が多く、これから他の研修においても前向きに検討すべき点であると思われます。

(埋蔵文化財センター)

興福寺所蔵絵図の調査

文化遺産研究部歴史研究室では現在、興福寺のご厚意により、興福寺所蔵の140点におよぶ絵図類を調査しています。1点1点について、ラベルを貼り、基本的な書誌事項を調書にとり、写真を撮影する作業を順次進めているところです。



興福寺所蔵絵図の調査風景

それらの絵図の過半は、興福寺の子院を描いた指図です。寛政3年(1791年)に各子院の指図を一括して作成しているようです。境内や建物の輪郭を描いた、図としては簡略なものですが、面積・長さなどの書き込みがあり、当時の各子院の敷地・建物の状況を知ることができます。

明治維新までは、興福寺の寺域は現在よりもはるかに広く、現在の裁判所・県庁・文化会館・美術館・国立博物館・奈良ホテルやその周辺は、すべて興福寺の寺域だったのです。しかし興福寺はそのように大きな力を持っていたがために、明治維新の廃仏毀釈の際には、寺の存続さえ危ぶまれる危機に見舞われます。その後関係者の努力によって、また寺勢を盛り返していることは周知の通りですが、興福寺旧境内地の景観が、昔と今とはすっかり変化してしまっていることは事実なのです。

近世以前の興福寺は、広大な寺域の中に、100あまりの子院が所狭しと立ち並んでいました。それらのうち、興福寺の中心伽藍や、一乗院・大乘院などの主要院家については研究も進んでいますが、以外の中小の子院については、よく分からない点が多いのです。今回の絵図類からは、それらの子院1つ1つの状況を詳しく知ることができます。まだ調査途中で、私たちも詳細を把握しきれてはいませんが、近世興福寺全体の景観を復原する上での、基本資料になるのではないかと思います、日々はりきって調査にいそしんでいるところです。(文化遺産研究部)

中国河南省文物考古研究所との共同研究

奈文研と中国河南省文物考古研究所は、2000年度から5カ年計画で鞏義市に所在する唐三彩窯及び出土品に関する共同研究を実施しています。昨年度は、



鞏義市黄冶窯出土唐三彩

将来の発掘調査に備え、窯跡の分布調査・窯跡周辺の地形測量を実施しました。また相互研鑽を目的とした研究員交流も行なっています。

本年度の大きな事業は、これまで試掘調査や踏査で発見されている唐三彩を一冊の図録にまとめることと最近新しく見つかった唐三彩の窯跡の試掘、そして鞏義唐三彩に関するこれまでの研究成果の公開です。10月の末には平城・藤原両調査部のメンバーが中心となり、図録作成のための遺物観察と撮影に出かけました。中国版図録は本年度末に、日本版は2002年度に出版します。

11月の後半には、中国から孫新民所長他4名の研究者をお招きし、22日には、孫所長と陳彦堂副研究員に講演をお願いしました。一般の方々にも聞いて頂く予定でしたが、来日の確定が遅かったため、やむなく近在の研究者約30名にお集まり頂き実施しました。孫所長には鞏義唐三彩の研究成果を、陳氏には唐三彩が生まれる前提となった漢代多彩陶器に関する最新の研究成果をお話し頂きました。

(埋蔵文化財センター)

研究会の開催

第1回 瓦・磚の製作実験についての研究会

平城宮大極殿・大極殿院の瓦に関する研究会のうち、瓦・磚の製作実験について、第1回研究会を11月12日に奈良文化財研究所の小講堂でおこないました。当日は、研究所の内外から22名の方が参加しました。

討論の内容は大きく4つに分け、1) 製作実験の目的・意義、2) 生瓦を作るまでの技術的復元のあり方、3) 窯の構築法、4) 今後のスケジュールの順で話し合いがおこなわれました。

第一の製作実験をおこなう必要性については圧倒的に賛成意見が多かったのですが、瓦製作の実験的な試みと、実際に大極殿で使う使わないという問題とは、一応別立てにして検討すべきであるという意見でまとまりました。

第二の生瓦を作るまでの製作技法上の問題ですが、粘土の選択及び粘土自体の分析、粘土の練り方、桶状造瓦器具の製作法、麻布の織り方、布袋製作法、縄叩き原体の復元などが話し合われました。

第三の窯の構築法については、事務局（考古第三調査室）側から、中山瓦窯の最古の窯は階段式登窯であるので、同一形態の2基を、一方は日乾しレンガで作り、他方は硬化剤を入れて固め、その後くりぬくという案を提示しました。これに対し、藤原宮の時代の瓦は須恵質で、平城宮になると焼きがあまり（大極殿の瓦も同じ）という巨視的な見方からすると、階段式登窯ではなく、平窯的な登窯にした方がよいのではないかという意見が出されました。討論の結果、最終的に階段式登窯1基、平窯的な登窯1基を作ることで意見がまとまりました。

第四の今後のスケジュールについては、まだ未定の部分が多いので十分な討論ができなかったのですが、さしあたりこの第1回の研究会をふまえて、考古第三調査室が「瓦・磚製作実験の計画書」を作り、来年度からの具体的な手順・費用を示すことを約束して会を終えました。この会に参加していただいた多くの方々・関係者に厚く御礼申し上げます。

(平城宮跡発掘調査部)

木簡学会第23回研究集会

木簡学会は、木簡に関する情報の蒐集・整理、木簡そのものについての研究・保存、その成果の普及と史料としての活用を目的とするユニークな学会です。奈文研が1975年から3回にわたって開催した木簡研究集会を母体として1978年に設立されました。

12月1日（土）・2日（日）の両日、今年で第23回を数える恒例の研究集会が、全国から160名に及ぶ日本古代史・考古学・東洋史・国語学などさまざまな分野の研究者の参加を得て、奈文研平城宮跡資料館講堂で開かれました。

「墨書土器と木簡」（高島英之氏）・「都城出土漆紙文書の来歴」（古尾谷知浩氏）の2本の研究報告、「長岡京右京六条二坊の調査と出土木簡」（中



木簡学会研究集会の討論風景の一コマ